

OB は月が一時間に運行する長さであつて、此れを延長すれば、月の従路となる。即ち、B は月が O を通過してから一時間後の位置であり、OB の延長上の右方に OB に等しく OD を取れば、D は O 通過一時間前の月の位置となる。此の OD 及 OB を夫々 12 等分して置けば、5 分毎の時間尺度が得られる。扱て、V を中心として、半径 L_1 L_2 なる圓で DB を切れば、各位相の月中心位置が求められる。又、V から DB に垂線を下し、M とすれば、M は蝕甚の時刻に當る。I II M III IV を中心として半径 S なる圓を書けば、描圖は完了する。4 つの接觸及蝕甚の時刻を徑路上に時間尺度で読み取り、此れを對衝の時刻に加減すれば、所要の時刻が求まる。尙、位置角も圖上に分度器を當てゝ容易に測定出来る。又、任意の時刻に於ける食の様子は、所要の時刻に相當する徑路上の點を中心として、半径 s なる圓を書けば良い。

§ 20: 結 語 以上で、月蝕に關する大體の計算法は述べ終つた。尤も、自分の非才と病氣が災して、初めのプランとは及びもつかぬものとなつて了つた。それに、二三の暴論を敢へてしたので、或は誤解されるかも知れない。若し御氣附きの箇所があつたら、御叱聲を賜らば、此上ない幸と思ふ。

次に、昭和 18 年 8 月の部分月蝕の要素を、天體位置表から抜いて置くから、是非計算されん事を望んで置きます。それには、最初に描圖計算をされ、後、數値計算される方が問題が少いであらう。

1943 年八月 15 日の月蝕要素

赤徑の對衝 (T) 8 月 13 日 19 時 14 分 51.1 秒 (世界時)

	太 陽	月
赤 經	9 ^h 37 ^m 45. ^s 54	21 ^h 37 ^m 45. ^s 54
赤 緯	+14° 9'18."2	-14°44' 9."0
赤經毎時變化	9."37	2 ^m 33."03
赤緯毎時變化	-46."6	+8'59."5
視 差	8."7	61'18."8
視 半 徑	15'47."7	16'41."6

最後に、二三の資料を心良く御貸與下された清水眞一氏の何時もながらの御厚意を深く感謝する次第。

(1943—5—13)

“天文年鑑”は：毎年天界の特輯として發行される“天文年鑑”は、會員中に 2 部以上の希望者があり、又、全く不要の人もあつたりするので、1944 年度からは、天界と離れて、“天文年表”として東京恒星社から單行されることとなつた。多分この年末に發行の筈。(編輯)